



～お葬儀屋さんのひとりごと～

喪中となる親族の範囲？期間中に控えるべき行事とは？

喪中とは、親族が亡くなった時に一定期間、故人を悼んで慎んだ生活を送るとともに、身内の穢れが他の人に及ばぬよう、できるだけ人と会わない生活をするを指します。喪に服すべき期間は故人との続柄で決まりますが、現代では喪中の制約はそれほど強く意識はされていないようです。

喪中の続柄の範囲とはどこまでか

親族が亡くなったら喪中になる、ということは分かっているけど、続柄についてどこまでだったら喪中になるのか、という判断は難しいところです。
続柄で言えば、一般的には2親等までは喪に服すようですが、喪中に関する決まりは厳密にはありません。3親等より遠い続柄でも、故人との関係性が深い場合は、喪に服しても問題はありません。

- ・配偶者 妻や夫
- ・1親等 父母、配偶者の父母、子ども
- ・2親等 兄弟姉妹およびその配偶者、祖父母、孫、配偶者の祖父母・兄弟姉妹およびその配偶者
- ・3親等 曾祖父母、おじ・おばおよびその配偶者、甥、姪、ひ孫、配偶者の曾祖父母・配偶者のおじ・おばおよびその配偶者

続柄によって喪中の期間が変わる

喪中の期間は、先ほどの親等数をベースに考えることになります。ただし明確に決められているものではないため、おおよその目安といえるものです。

配偶者や1親等である父母、子どもが1年、2親等である兄弟姉妹や祖父母が1ヵ月～6ヵ月です。
上記に挙げた喪中期間は、明治時代に取り決められた（1947年に撤廃）ものを参考としていますが、当時は夫の喪中期間13ヵ月に対し妻90日、夫の両親の喪中期間150日に対し妻の両親はなし、と公平さに欠く内容でした。現在ではこれにとらわれず、喪中期間は1年という見方が一般的で、より故人との関係性が重視されています。

喪中の期間に控える行事

こうした喪中の期間には、控えた方がよいとされる行事があります。基本的には、華やかで公的な行事は避けるようにしますが、現代では四十九日を過ぎればあまり制限しなくてもよいという考え方も広まっています。

正月飾りやお祝い事

正月が喪中になった場合、一連のお祝い事はしないようにするのが一般的です。具体的には、門松、しめなわ、鏡餅などを飾ることや、豪華なおせち料理やお年玉をあげることも含まれます。また年賀状のやり取りを控えることも広く知られているでしょう。代わりに喪中はがきを出すのがマナーです。

結婚式への出席

穢れを持ち込むという観点から、招待された結婚式は原則的には欠席するのがマナーとされています。ただし、不幸が起こる前から出席を決めていた場合は出席をしても問題ないともいわれています。

自身の結婚式

式場などの予約前であれば、喪が明けるのを待って式を挙げるのが一般的です。既に予約をしていたり、招待状を発送していたりする場合は、両家で話し合ってお決めしましょう。故人に対する供養の気持ちも込めて、あえて行うという選択肢もあります。

喪中期間でもやってよいこと、喪中でも問題ないとされる行事もいくつか紹介します。

初詣

お寺への初詣であれば問題ありません。神社の場合は死を穢れとみなして遠ざけますが、仏教の場合はそうした考え方はないからです。四十九日が済むまでは法要も続きますので、その間、お寺に行くこと自体に問題はなく、むしろよいこととされています。それに対して神社への初詣には注意が必要です。

お中元やお歳暮

自分が喪中でも、贈る相手が喪中でも、お中元やお歳暮については特に問題はないとされています。これは、お中元やお歳暮は感謝の気持ちを伝えるものであり、お祝い事ではないからです。ただし四十九日が終わるまでは自粛するのと、めでたさを意味する紅白ののし紙を使うことは控えましょう。

